

2020 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	助教	正岡 元
最終学歴	学 位	専 門 分 野
広島大学大学院総合科学研究科博士課程 後期単位取得退学	博士 (学術)	情報通信ネットワーク

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

本学における「三つの言葉」を念頭に置き、知識そのものではなく、それらの知識を見つけ出す、あるいは作り出す方法を学生が身に着けられるような教育を目指す。中でもコンピュータの演習科目では、コンピュータを利用する意義の理解を深めることを目標とし、技術だけでなく技術を使って何をしたいかを意識することを重視し、操作方法の習得に偏らないようにする。また特に本年度はオンラインでの双方向性を維持することに重点を置く。

(計画)

毎回の講義の冒頭で講義の意義、当該回の内容について示し、コンピュータ科目を学ぶ意義を確認することで目的意識を持たせる。特に OS とプログラミングではプログラムを作成して何をしたいか考える機会を設け、かつ実際に動くプログラムを小課題として多く取り入れることで、達成感やものづくりの楽しさを体感できるようにする。また、毎回講義中に課す課題は採点後速やかに返却し、間違いそのものの修正ではなく、自らが間違いやすいポイントの見直しに利用するように誘導する。

基礎演習では毎回学生同士で会話をする時間を設け、友人関係の構築や学生同士での相談などができるような関係づくりを行っていく。今後登校した際にすぐに友人関係を築き、キャンパス生活を始められるような環境作りを他の教員とも協力し合って行っていく。

○担当科目（前期・後期）

(前期)

入門コンピュータ、基礎演習Ⅰ、総合演習Ⅰ

(後期)

基礎コンピュータ、コンピュータ概論、OS とプログラミング、基礎演習Ⅱ、総合演習Ⅱ

○教育方法の実践

今年度は全学でオンラインだった前期だけでなく、後期についても教室定員などの都合もあり、担当科目のほとんどはオンラインで行うこととなった。その中で、入門コンピュータ、基礎コンピュータなどのコンピュータを用いた実習科目については資料の作成や学生の質問への対応など、さまざまな工夫を行った。

主に Google Chat を用いて、科目のチャットルームを開設し、資料の配信のアナウンスをはじめ、実習の補足、課題の注意点の共有などを行った。また学生一人一人と個別のチャットを行い、質問に対応し、必要に応じて個別の Google Meet による直接指導などを行った。

コンピュータ概論などの講義科目では、動画資料の配信を行った。動画の作成にあたっては、S/N 比に注意し、音声聞き取りやすくなるように音声処理を行った上で、毎回処理方法を変えながら学生にアンケートを取って映像の見やすさ、音声の聞き取りやすさを比較するなどの試行錯誤をおこなった。また、解像度を高くしたうえでフレームレートを下げることによって、高画質で細かい

文字を読みやすくしたままで動画のサイズを小さくするなど、学生の通信環境に配慮しながら授業の質を下げない工夫を行った。

○作成した教科書・教材

入門コンピュータ：コンピュータリテラシー2020年度版（高木康彦先生と共著）

基礎コンピュータ：コンピュータリテラシー2020年度版（高木康彦先生と共著）

コンピュータ概論：スライド資料 Vol.2020, No.01-15、動画教材 No.01-15

基礎演習 I： 情報リテラシー2020年度版

OS とプログラミング：配布資料 Vol.2020, No.01-15

○自己評価

今年度は授業内容を精査しながら進める余裕を確保することが難しく、主にメディア授業への対応についての技術的な試みに終始してしまった点が反省である。コロナ禍という情勢の中である程度やむを得ない点があるとはいえ、その負担はそのまま学生にのしかかるため、授業の質の確保には相当の労力をかける必要があった。その点では、オンライン化に伴う技術的なサポートが大学から得られれば助かると考える。

II 研究活動

○研究課題

自動で生成・集計を行うセキュアなアンケートシステムの研究と開発

○目標・計画

（目標）

簡単なテキストデータで設問と選択肢を記述するだけで、それを読み込んで自動的にアンケートサイトを生成するシステムを研究、開発する。

（計画）

まずアンケートに必要な設問の形式を洗い出し、データベースの仕様を作成する。また、設問を記述するデータ形式の仕様を作成する。その仕様に基づいてすでに構築したデータベースの設計を見直し、改めて実装を行う。

一方設問のデータを入力するための Web ユーザインタフェースを設計する。現在のアンケートの回答のための Web ユーザインタフェースもそれに合わせて設計を行う。

○2013年4月から2021年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

（学術論文）

- ・正岡元. 「学生の持ち込み端末の学内無線 LAN 接続のための MAC アドレス自動登録システムの開発と運用」. 『東邦学誌』, 第 44 号, 第 1 号, 2015 年, 63~70 号.

（学会発表）

（特許）

（その他）

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

○所属学会

情報処理学会

○自己評価

研究活動そのものは、オンライン授業の需要にあわせてテーマを変えたものの、ある程度の成果をあげることはできたと考える。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

委員会やWGなど、情報工学分野の教員として積極的に関わり、「事を任せる人格」と認められるよう努力する。

(計画)

学術情報センター運営委員会委員として、教育、研究活動の補助となるICT技術の普及に努める。

Googleの様々なサービスの検証を行い、ドキュメントにまとめる活動を引き続き継続して行う。

○学内委員等

学術情報センター運営委員会、入試問題作成委員会

○自己評価

前期はほぼすべての授業がオンラインとなり、学部の有志メンバーら（谷村准教授、中野助教など）とともに、情報収集や学内向けマニュアル作りなどを行った。後日、資料が大変役に立ったとの言葉を幾人かの教員から聞き、ある程度の貢献ができたのではないかと考える。

学部IRのWGメンバーとして、谷村准教授、木野村助教とともに学部の全学生へのアンケートを行い、分析をして学部に公表するなど、演習選択における情報公開やマッチングの精度を高めるための材料を提供することができた。また、次年度から始まる学生のBYODに向けて、ガイダンスの準備など学部の行事への協力を行ったことなど、学部の運営にも貢献できたと考える。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

研究成果など、最先端の知見を公表する活動を行う。

(計画)

研究成果を公表する。出前授業や教員免許状更新講習などに参加する。

○学会活動等

○地域連携・社会貢献等

○自己評価

成果の公表という点では目標を達成できておらず、次年度以降、紀要等への投稿を行っていくことを検討する。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

研究会等への参加を通して専門および周辺分野の専門的知識の向上を目指す。

VI 総括

今年度はオンライン授業への対応に終始することになった。成果や貢献は一定程度できたと考える

が、今後は単なる対応だけでなく、オンラインを活かして授業の質を高めることへの貢献ができるように努力していくことを目標としたい。

以 上